

風邪の流行が心配でしたが、十名が元気に顔をそろえ、第六巻の予定箇所を完読できました。いったん姿を消した楠正成が再起し、赤松円心が挙兵するなど元弘の乱も再起動です。当時の人たちは、世の中がどうなるか知らないわけですから不安だったでしょうね。未来記に頼ろうとする気持ちもわかる気がします。◇この日読んだ箇所の概要は次の通りです。

(一) 民部卿三位殿御夢の事

天皇還都のお告げ (p275～278)

大塔宮の母民部卿三位局は息子と夫(後醍醐天皇)が都を離れた寂しさに耐えかねて北野天満宮に参籠する。夢に現れた天神が、梅の枝に結んだ短冊で天皇の還都を予告、希望を取り戻した。

※大塔宮の母 太平記のいう「民部卿三位局」という女性性は通説では、北畠親房の叔母に当たる北畠親子とされる。すると、親房と大塔宮は従兄弟という関係になる。倒幕の立役者と吉野朝の重鎮が近親だったわけで、討幕派の背後関係を探るうえで極めて重要な情報といえる。

(二) 楠天王寺に出づる事

下赤坂城を取り戻す (p279～281)

楠正成は最初に挙兵した下赤坂城を落とされた後、姿をくらししていたが、元弘2年(1332)12月、突如、現れてこの城を奪回した。六波羅の命令で守備に当たっていた紀州の湯浅定仏を兵糧運搬兵になりすまして攻撃したもので、正成らしい奇襲戦術の一例として名高い。

※紀州湯浅一族 紀伊国の最有力武士団。平治の乱のとき、熊野詣での途次のあった平清盛が京都に戻るのを援けて平家に重用され、源平合戦後も神護寺の文覚上人との縁で源頼朝に信任された。一族から高山寺の明恵上人を出したことも有名。上人のために地元へ施無畏寺を創建し、この寺を中心に一族の結束をはかった。

(三) 六波羅勢討たる事

天王寺・渡辺合戦 (p281～285)

楠正成は、下赤坂城を奪回すると、すかさず住吉、天王寺、渡辺方面に進出した。驚いた六波羅は探題北条仲時の被官隅田、高橋を大将に畿内近国の兵を楠討伐に向かわせた。正成は小兵をおとりにして六波羅勢に渡辺橋を越えさせ、渡り終えたと見るや、隠していた精兵で攻撃、驚いて退却する敵を川に追い落として大勝した。

※中世の渡辺 現在の天満橋付近。淀川を船で下り、こ

こで上陸して天王寺・熊野参詣路向かう陸路の起点だった。一帯は朝廷に魚介類を供御する大江御厨で、頼光四天王の一人、渡辺綱で知られる武士団、渡辺党の本拠地。

(五) 太子未来記の事  
正成「未来記」を読む (p293～296)

六波羅勢を破った楠正成は、天王寺に参詣し、寺が秘蔵する聖徳太子書の「未来記」を読んだ。「日西天に没すること三百七十余ケ日」とあるのは、後醍醐天皇の隠岐配流が一年余で終わる意味だと解釈した正成は、天皇の明春還都を確信した。

※未来記流行 鎌倉期の説話集「古事談」は、聖徳太子廟から石筍に刻まれた未来記が出現したと伝える。後に法隆寺僧の演出と判明するが、その後も未来記の出現は続き、藤原定家の「明月記」にも報告されている。後醍醐天皇側近の吉田定房は、四点もの未来記を確認、その内容から天皇の帰還を予想した。未来記症候群の様相。

(六) 赤松禅門令旨を賜る事 (七) 東国勢上洛の事  
西国の蜂起に幕府が遠征軍 (p296～301)

大塔宮の令旨を得た播磨佐用庄の赤松円心は、苔縄城で挙兵、直ちに山陽、山陰両道を封鎖して西国からの幕府軍の上洛を阻止する作戦に出た。危機感を募らせた幕府は、東国勢を中心とする大軍を派遣、吉野、赤坂、金剛に籠る大塔宮、楠正成らの討伐に乗り出した。

(九) 赤坂合戦の事

上赤坂城陥落 (p312～317)

難攻不落の上赤坂城は土中に樋を通して水を得ていた。それを見破られて水を止められ、たまりかねた大将の平野将監は救命を条件に降参を申し入れた。幕府側は恩賞まで約束して承諾しながら、武装解除すると全員を六波羅へ連行、六条河原で処刑した。

第8巻輪読予定ページ (5月20日)

- 1) 371先帝すでに～373失はず。
- 2) 378六波羅には～380移しける。
- 3) 384さる程に～386有様なり。
- 4) 390筑前守貞範～  
392引き返しける。
- 5) 392暫くあれば～394笑ひける。
- 6) 396去る3月～400なりにけれ。
- 7) 407八幡～410引つ返す。
- 8) 419京都数ヶ度～422懸けたる。
- 9) 422さる程に～425去りにけり。
- 10) 425夕陽に～427堅めたる。
- 11) 427千種殿は～  
429籠もりける。